

大つごもり

樋口一葉

青空文庫

上

井戸は車にて綱の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆうひゆうと吹ぬきの寒さ、おお堪えがたと竈の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大台にして叱りとばさるる婢女の身つらや、はじめ受宿の老嫗さまが言葉には御子様がたは男女六人、なれども常住家内にお出あそばすは御総領と末お二人、少し御新造は機嫌かいなれど、目色顔色を呑みこんでしまへば大した事もなく、結句おだてに乗る質なれば、御前の出様一つで半襟半がけ前垂の紐にも事は欠くまじ、御身代は町内第一にて、その代り吝き事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘い方ゆゑ、少しのほまちは無き事も有るまじ、厭やに成つたら私の所まで端書一枚、こまかき事は入らず、他所の口を探せとならば足は惜しまじ、何れ奉公の秘伝は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御気に入らぬ事も無き筈と定めて、かかる鬼の主をも持つぞかし、目見えの濟みて三日の後、七歳になる嬢さま踊りのさらひに午後よりとある、その支度は朝湯にみがき上

げてと霜氷る暁、あたたかき寢床の中より御新造灰吹きをたたきて、これこれと、此詞が
目覚しの時計より胸にひびきて、三言とは呼ばれもせず帯より先に襷がけの甲斐々々しく、
井戸端に出れば月かげ流しに残りて、肌を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風
呂にて大きからねど、二つの手桶に溢るるほど汲みて、十三は入れねば成らず、大汗に成
りて運びけるうち、輪宝のすがりし曲み齒の水ばき下駄、前鼻緒のゆるゆるに成りて、
指を浮かさねば他愛の無きやう成し、その下駄にて重き物を持ちたれば足もと覚束なく
て流し元の氷にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべば井戸がはにて向ふ臚したたかに
打ちて、可愛や雪はづかしき膚に紫の生々しくなりぬ、手桶をも其処に投出して一つは
満足成しが一つは底ぬけに成りけり、此桶の価なほどこ知らねど、身代これが為につづ
れるかの様に御新造の額際ひたへぎはに青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、その日
一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、この家の品は無代では出来ぬ、
主の物とて粗末に思ふたら罰が当るぞえと明け暮れの談義、来る人毎に告げられて若き心
には恥かしく、その後は物ごとに念を入れて、遂ひに麁想をせぬやうに成りぬ、世間に下
女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常の事、三日
四日に帰りしもあれば一夜居て逃出しもあらん、開闢以来を尋ねたらば折る指にあ

の内儀さまが袖口おもはるる、思へばお峯は辛棒もの、あれに酷く当たたらば天罰たちどころに、この後は東京広しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。

秋より只一人の伯父が煩ひて、商売の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居に成しよしは聞けど、むづかしき主を持つ身の給金を先きに貰へばこの身は売りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目当にして幾足幾町とそのしらべの苦るしき、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡にして、お暇ともならば弥々病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯に一日の厄介も気の毒なり、その内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此処に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一鉢物せわしき中を、こと更に選らみて綾羅をかざり、一昨日出そろひしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中との触れに成けり、このお供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらばそれまでとして遊びの代りのお暇を願ひしにさすがは日頃の勤めぶりもあり、一日すぎでの次の日、早く行きて早く帰れと、さりとは気ままの仰

せに有難うぞんじますと言ひしは覚えて、頓ては車の上に小石川はまだかまだかと鈍か
しがりぬ。

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神はこの
頭に宿り給ふべき大葉罐の額ぎはぴかぴかとして、これを目印に田町より菊坂あたり
へかけて、茄子大根の御用をもつとめける、薄元手を折かへすなれば、折から直の安うて
嵩のある物より外は棹なき舟に乗合の胡瓜、苞に松茸の初物などは持たで、八百安が物
は何時も帳面につけた様など笑はるれど、愛顧は有がたきもの、曲りなりにも親子三人の
口をぬらして、三之助とて八歳になるを五厘学校に通はするほどの義務もしけれど、世の
秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買出しの荷を我が家までかつぎ
入れるとそのまま、発熱につづいて骨病みの出しやら、三月ごしの今日まで商ひは更な
る事、段々に喰べへらして天秤まで売る仕義になれば、表店の活計たちがたく、月
五十銭の裏屋に人目の恥を厭ふべき身ならず、又時節が有らばとて引越しも無惨や車に乗
するは病人ばかり、片手に足らぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峯は車より下
りて、処此処と尋ぬるうち、凧紙風船などを軒につるして、子供を集めたる駄菓子やの門
に、もし三之助の交じりてかと覗けど、影も見えぬに落胆して思はず往來を見れば、我

が居るよりは向ひのがはを瘦やせぎすの子供が薬瓶くすりびんもちて行く後姿、三之助よりは丈たけも高く余り瘦せたる子と思へど、様子の似たるにつかつかと駆け寄りて顔をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちやんで有つたか、さても好い処ところでと伴なはれて行くに、酒やと芋やの奥深く、溝板どぶいたがたがたと薄くらき裏に入れば、三之助は先へ駆けて、父ととさん、母かかさん、姉さんを連れて帰つたと門かど口くちより呼び立てぬ。

何お峯が来たかと安兵衛が起上れば、女房つまは内職の仕立物に余念なかりし手をやめて、まあまあこれは珍らしいと手を取らぬばかりに喜ばれ、見れば六畳一間けんに一間の戸棚けん只一つ、箆たんす筒長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかけも無く、今戸焼の四角なるを同じ形なりの箱に入れて、これがそもそもこの家の道具いへらしき物、聞けば米櫃こめびつも無きよし、さりとは悲しき成ゆき、師走の空に芝居みる人も有るをとお峯はまづ涙ぐまれて、まづまづ風の寒きに寝てお出いでなされませ、と堅かた焼やきに似し薄蒲団うすぶとんを伯父の肩に着せて、さぞさぞ沢山たんの御苦労なさりましたる、伯母様も何処どこやら瘦せが見えまする、心配のあまり煩わづふて下さりますな、それでも日増しに快よい方で御座んすか、手紙で様子は聞けど見ねば気にかかりて、今日のお暇いとまを待ちに待つて漸やっとの事、何家うちなどはどうでも宜よござります、伯父様御全快にならば表店おもてに出るも訳なき事なれば、一日も早く快よく成つて下され、伯父

様に何ぞと存じたれど、道は遠し心は急く、車夫の足が何時より遅いやうに思はれて、御好物の飴屋が軒も見はぐりました、此金は少々なれど私が小遣の残り、麴町の御親類よりお客の有し時、その御隠居さま寸白のお起りなされてお苦しみの有しに、夜を徹してお腰をもみたれば、前垂でも買へとて下された、それや、これや、お家は堅けれど他処よりのお方が臍負になされて、伯父さま喜んで下され、勤めにくくも御座んせぬ、この巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素なれば伯母さま懸けて下され、巾着は少し形を換へて三之助がお弁当の袋に丁度宜いやら、それでも学校へは行ますか、お清書が有らば姉にも見せてとそれからそれへ言ふ事長し。七歳のとくに父親得意場の蔵普請に、足場を昇りて中ぬりの泥鍔を持ちながら、下なる奴に物いひつけんと振向く途端、曆に黒ぼしの仏滅とでも言ふ日で有しか、年来馴れたる足場をあやまりて、落たるも落たるも下は敷石に模様への処ありて、掘おこして積みたてたる切角に頭脳したたか打ちつけたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後に恐ろしがりぬ、母は安兵衛が同胞なれば此処に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重く成りて亡せられたれば、後は安兵衛夫婦を親として、十八の今日まで恩はいふに及ばず、姉さんと呼ぶるれば三之助は弟のやうに可愛く、此処へ此処へと呼んで背を撫で顔を覗いて、さぞ父さんが病気で淋しく愁らかる、お

正月も直きに来れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母かかさんに無理をいふて困らせては成り
 ませぬと教ゆれば、困らせる処か、お峯聞いてくれ、歳としは八つなれど身からだも大きおほし力もあ
 る、我が寐ねてからは稼かせぎ人なしの費用いりめは重なる、四苦八苦見かねたやら、表の塩物やが野
 郎と一処しこに、蜆しじみを買かひ出しては足の及ぶだけ担かぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商あひは必
 らずある、一つは天道さまが奴やつこの孝行を見徹みとほしてか、となりかくなり薬代は三が働あぎ、お
 峯ほめて遣やつてくれとて、父は蒲団をかぶりて涙に声をしぼりぬ。学校は好きにも好きに
 も遂つひに世話をやかしたる事なく、朝めし喰べると馳かけ出して三時の退校ひけに道草のいたづ
 らした事なく、自慢では無けれど先生さまにも褒ほめ物の子を、貧乏なればこそ蜆しじみを担かがせ
 て、この寒空に小さな足に草鞋わらじをはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。お峯は
 三之助を抱かきしめて、さてもさても世間に無類の孝行、大がらとても八歳やっは八歳、天てん秤びん
 肩うにして痛みはせぬか、足に草鞋わらじくひは出来ぬかや、堪かん忍にんして下され、今日けふよりは私も
 家うちに歸りて伯父様の介抱活計くわくけいの助けもします、知らぬ事とて今朝けさまでも釣瓶つるべの繩の氷を
 愁つらがつたは勿もつ躰たいない、学校がかりの年に蜆しじみを担かがせて姉が長い着物きてゐらりようか、
 伯父おじさま暇いとまを取とつて下され、私わたしは最早もはや奉公はよしますとて取乱して泣きぬ。三之助はを
 となく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじとうつ向きたる肩のあたり、針目あら

はに衣破れて、此肩に担ぐか見る目も愁らし、安兵衛はお峯が暇を取らんと言ふにそれは
以ての外、志しは嬉しけれど帰りてからが女の働き、そのみか御主人へは給金の前借も
あり、それツ、と言ふて帰られる物では無し、初奉公が肝腎、辛棒がならで戻つたと思
はれても成らねば、お主大事に勤めてくれ、我が病氣も長くは有るまじ、少しよくば気の
張弓、引つづいて商ひもなる道理、ああ今半月の今歳が過れば新年は好き事も来たるべし、
何事も辛棒々々、三之助も辛棒してくれ、お峯も辛棒してくれとて涙を納めぬ。珍らしき
客に馳走は出来ねど好物の今川焼、里芋の煮ころがしなど、沢山たべろよと言ふ言葉が嬉
し、苦勞はかけまじと思へど見す見す大晦日に迫りたる家の難義、胸に痞への病は癩に
あらねどそもそも床に就きたる時、田町の高利かしより三月しばりとて十円かりし、一円
五拾銭は天利とて手に入りしは八円半、九月の末よりなればこの月はどうでも約束の期限
なれど、この中にて何となるべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先より血を出して
日に拾銭の稼ぎも成らず、三之助に聞かすとも甲斐なし、お峯が主は白金の台町
に貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅美々しく、我れ一度お峯への用事あ
りて門まで行きしが、千両にては出来まじき土蔵の普請、羨やましき富貴と見たりし、そ
の主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を聞かぬとは申されまじ、この月末

に書かへを泣きつきて、をどりの一兩二分を此処に払へば又三月の延期にはなる、かくいはば欲に似たれど、大道餅買ふてなり三ヶ日の雑煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日までに金二兩、言ひにくく共この才覚たのみたきよしを言ひ出しかるに、お峯しばらく思案して、よろしう御座んす慥かに受合ひました、むづかしくはお給金の前借にしてなり願ひましよ、見る目と家内とは違ひて何処にも金銭の埒は明きにくけれど、多くでは無しそれだけで此処の始末がつかねば、理由を聞いて厭やは仰せらるまじ、それにつけても首尾そこなうては成らねば、今日は私は帰ります、又の宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金を受合ける。金は何として越す、三之助を貰ひにやらかとあれば、ほんにそれで御座んす、常日さへあるに大晦日といふては私の身に隙はあるまじ、道の遠きに可憐さうなれど三ちゃんを頼みます、昼前のうちに必らず必らず支度はして置まするとて、首尾よく受合ひてお峯は帰りぬ。

下

石之助とて山村の総領息子、母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督

は妹娘いとむすめの中なかにとの相談、十年の昔しより耳はきに挟はさみて面白おもしろからず、今の世に勘当くわんたうのならぬこそをかしけれ、思ひのままに遊びて母が泣きをと父親てておやの事は忘れて、十五の春より不ふ了りょう簡けんをはじめぬ、男振をとこぶりにがみありて利き発はつらしき眼まなぎし、色は黒くろけれど好きすき様子ようすとて四隣あたりの娘むすめどもが風説うわさも聞きえけれど、唯ただ乱暴らんぼう一途いちずに品川しんがわへも足は向むかくれど騒さわぎはその座ざぎり、夜中よなかに車くるまを飛とばして車町くるままちの破落戸くわらくろがもとをたたき起し、それ酒さけかへ肴さかなと、紙し入れの底そこをはたきて無理むりを徹とほすが道楽だうらくなりけり、到底とてどもこれに相續さうぞくは石油蔵せうじゆざうへ火かを入れるやうな物、身代みしろ烟けふりと成なりて消え残る我等何とせん、あとの兄弟けいだいも不憫ふびんと母親ぼてん、父ちちに讒言ざんげんの絶間たぎりなく、さりとして此放蕩こしやうたう子こを養子やしよにと申受まうくる人この世にはあるまじ、とかくは有金うけがねの何ほども分わけて、若隠居わかしよの別戸籍べつこけきにと内々うちうちの相談は極きまりたれど、本人ほんにんうわの空そらに聞流きんりゅうして手てに乗のらず、分配金ぶんぱいけんは一万、隠居おんこ扶持ぶぢ月々げげおこして、遊興ゆうきやうに関かを据すへず、父上ちちのうへなくならば親代おやしろりの我われれ、兄上あにのうへと捧ささげて竈かまどの神かみの松まつ一本いっぴんも我われが託宣たくせんを聞きく心こころならば、いかにもいかにも別戸べつこの御主人ごしゆじんに成なりて、この家やの為ためには働はたらかぬが勝手かたて、それ宜よろしくば仰おほせの通りとおりに成なりましよと、どうでも嫌きらやがらせを言いひて困こらせける。去歳こぞにくらべて長屋ちやうやもふゑたり、所得しよとくは倍ばいにと世間よこの口くちより我われが家の様子ようすを知しりて、をかしやをかしや、そのやうに延のばして誰たが物ものにする気きぞ、火事かじは燈明皿とうめいひらよりも出る物ものぞかし、総領そうりやうと名なのる火かの玉たまがころがるとは

知らぬか、やがて巻きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を当てに大呑みの場処もさだめぬ。

それ兄様のお帰りと言へば、妹ども怕がりて腫れ物のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と我がままをつのらして、炬燵に両足、酔ぎめの水を水をと狼藉はこれに止めをさしぬ、憎くしと思へどさすがに義理は愁らき物かや、母親かげの毒舌をかくして風引かぬやうに小抱巻何くれと枕まで宛がひて、明日の支度のむしり田作、人手にかけては粗末になる物と聞えよがしの経済を枕もとに見しらせぬ。正午も近づけばお峯は伯父への約束こころもと無く、御新造が御機嫌を見はからふに暇も無ければ、僅かの手すきに頭りの手拭ひを丸めて、このほどより願ひましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、今日の昼る過ぎにと先方へ約束のきびしき金とやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合せ私の喜び、いついつまでも御恩に着まするとて手をすりて頼みける、最初いひ出し時にやふやながら結局は宜しと有し言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅いひては却りて如何と今日までも我慢しけれど、約束は今日と言ふ大晦日のひる前、忘れてか何とも仰せの無き心もとなさ、我れには身に迫りし大事と言ひにくきを我慢してかくと申ける、御新造は驚きたるやうの惘れ顔して、それはまあ何の事やら、なるほどお

前が伯父さんの病氣、つづいて借金の話しも聞きましたが、今が今私しの宅から立換へようとは言はなかつた筈、それはお前が何ぞの聞違へ、私は毛頭も覚えの無き事と、これがこの人の十八番とはてもさても情なし。

花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて褌を重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものの兄が見る目うるさし、早く出てゆけ疾く去ねと思ふ思ひは口にこそ出さね、もち前の疝癩したに堪えがたく、智識の坊さまが目には御覽じたらば、炎につつまれて身は黒烟りに心は狂乱の折ふし、言ふ事もいふ事、金は敵薬ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覚えあれど何のそれを厭ふ事かは、大方お前が聞ちがへと立きりて、烟草輪にふき私は知らぬと濟しけり。

兎も大金でもある事か、金なら二円、しかも口づから承知して置きながら十日とたたぬに耄ろくはなさるまじ、あれあの懸け硯の引出しにも、これは手つかずの分と一ト束、十か二十か悉皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔、三之助に雑煮のはしも取らざるると言はれしを思ふにも、どうでも欲しきはあの金ぞ、恨めしきは御新造とお峯は口惜しさに物も言はれず、常々をとなしき身は理屈づめにやり込る術もなく、すごすごと勝手に立てば正午の号砲の音たかく、かかる折ふし殊更胸にひびくものなり。

お母さまに直様お出下さるやう、今朝よりのお苦るしみに、潮時は午後、初産なれば旦那とり止めなくお騒ぎなされて、お老人なき家なれば混雑お話しならず、今が今お出でをとて、生死の分目といふ初産に、西応寺の娘がもとより迎ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬ物なり、家のうちには金もあり、放蕩どのが寐てはいる、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、車には乗りけれど、かかる時気樂の良人が心根にくく、今日あたり沖釣りでも無き物をと、太公望がはり合ひなき人をつくづくと恨みて御新造いでられぬ。

行ちがへに三之助、此処と聞きたる白金台町、相違なく尋ねあてて、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕々のぞけば、誰れぞ来しかと竈の前に泣き伏したるお峯が、涙をかくして見出せばこの子、おお宜く来たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉さま這入つても叱かられはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお礼を申て来いと父さんが言ひましたと、子細を知らねば喜び顔つらや、まづまづ待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に余念なく、小僧どのはまだお使ひより帰らず、お針は二階にてしかも聾なれば子細なし、若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中、拝みまする神さま仏さ

ま、私は悪人になります、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお当てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれどこの金ぬすませて下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して帰したる始終を、見し人なしと思へるは愚かや。

.....

その日も暮れ近く旦那つりより恵比須がほして帰らるれば、御新造も続いて、安産の喜びに送りの車夫にまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞ひまする、明日は早くに妹共の誰れなりとも、一人は必らず手伝はすると言ふて下され、さてさて御苦労と蠟燭代などを遣りて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身躰を片身かりたき物、お峯小松菜はゆでて置いたか、数の子は洗つたか、旦那はお帰りに成つたか、若旦那はと、これは小声に、まだと聞いて額に皺を寄せぬ。

石之助その夜はをとなく、新年は明日よりの三ヶ日なりとも、我が家にて祝ふべき筈ながら御存じの締りなし、堅くるしき袴づれに挨拶も面倒、意見も実は聞あきたり、親類の顔に美しくしきも無ければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束も御座れば、一先お暇として何れ春永に頂戴の数々は願ひまする、折からお目出度矢先、お

歳暮には何ほど下さりますかと、朝より寝込みて父の歸りを待ちしは此金なり、子は三界
 の首^{くび}械^{かせ}といへど、まこと放蕩^{のら}を子に持つ親ばかり不幸なるは無し、切られぬ縁の血筋と
 いへば有るほどの悪^{いたづら}戯^らを尽して瓦^{ぐわ}解^{かい}の曉に落こむはこの淵^{ふち}、知らぬと言ひても世間の
 ゆるさねば、家の名をしく我が顔はづかしきに惜しき倉庫^{くら}をも開くぞかし、それを見込み
 て石之助、今宵を期限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を為^したるもあれば、花見のむ
 しろに狂風一陣、破落^{ごろう}戸^き仲間に遣る物を遣らねばこの納まりむづかしく、我れは詮^{せん}方^{かた}
 けれどお名前に申わけなしなどと、つまりは此金^{これ}の欲しと聞えぬ。母は大方かかる事と今^け
 朝^さよりの懸念^{けねん}うたがひなく、幾金^{いくら}とねだるか、ぬるき旦那どのの処置はがゆしと思へど、
 我れも口にては勝がたき石之助の弁に、お峯を泣かせし今朝とは変りて父が顔色いかにと
 ばかり、折々見やる尻目^{しりめ}おそろし、父は静かに金庫の間へ立ちしが頓^{やが}て五十円束一つ持ち
 来て、これは貴様に遣るではなし、まだ縁づかぬ妹どもが不憫^{ふびん}、姉が良人^{おつと}の顔にもかかる、
 この山村は代々堅気一方に正直律義を真^ま向^{まう}にして、悪い風説^{うわさ}を立てられた事も無き筈を、
 天魔の生れがはりか貴様といふ悪者^{わる}の出来て、無き余りの無分別に人の懐^{ふところ}でも覗^{ねら}うやうに
 ならば、恥は我が一代にとどまらず、重しといふとも身代は二の次、親兄弟に恥を見する
 な、貴様にいふとも甲斐^{かひ}は無けれど尋常^{なみなみ}ならば山村の若旦那とて、入^いらぬ世間に悪評も

うけず、我が代りの年礼に少しの労をも助くる筈を、六十に近き親に泣きを見るは罰あたりで無きか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故なぜこれが分りをらぬ、さあ行け、帰れ、何処へでも帰れ、この家に恥は見するなとて父は奥深く這入りて、金は石之助が懐ふところ中に入りぬ。

.....

お母様御機嫌よう好い新年をお迎ひなされませ、左様ならば参りますと、暇いとまごひ乞こわぎとうやうやしく、お峯下駄を直せ、お玄関からお帰りでは無いお出かけだぞと凶づぶづぶ分々々々しく大手を振りて、行先は何処、父が涕なみだは一夜の騒よぎに夢とやならん、持つまじきは放蕩のら息子、持つまじきは放蕩のらを仕立したつる継母まははぞかし。塩花こそふらね跡は一まづ掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、どうすればあのやうに凶太くなられるか、あの子を生んだ母かかさんの顔が見たい、と御新造例に依よつて毒舌をみがきぬ。お峯はこの出来事も何として耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻さつきの仕業はと今更夢路を辿たどりて、おもへばこの事あらはれずして済むべきや、万が中なかなる一枚とても数ふれば目の前なるを、願ひの高に相応の員数いんすう手近の処になく成しとあらば、我れにしても疑ひは何処いづこに向くべき、調べられなば何とせん、何といは

ん、言ひ抜けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかかる、我が罪は覚悟の上なれど物がたき伯父様にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひ、かかる事もする物と人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよから、伯父様に疵のつかぬやう、我身が頓死する法は無きかと目は御新造が起居にしたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

おほかんちやう
大勘定

とてこの夜あるほどの金をまとめて封印の事あり、御新造それぞれと思ひ出

して、懸け硯に先程、屋根やの太郎に貸付のもどり彼金が二十御座りました、お筆お峯、かけ硯を此処へと奥の間より呼ばれて、最早この時わが命は無き物、大旦那が御目通りに始めよりの事を申、御新造が無情そのままに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同腹で無きだけを何処までも陳べて、聞かれずば甲斐なしその場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠処の羊なり。

.....

お峯が引出したるは唯二枚、残りは十八あるべき筈を、いかにしけん東のまま見えずとて底をかへして振へども甲斐なし、怪しきは落散し紙切れにいつ認めしか受取一通。

(引出しの分も拝借致し候

石之助)

さては放蕩かのらと人々顔を見合せてお峯がが詮議せんぎは無かりき、孝の余徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いやいや知りて序ついでに冠かぶりし罪かも知れず、さらば石之助はお峯がが守り本尊なるべし、後のちの事しりたや。

青空文庫情報

底本：「こぼりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文学界」

1894（明治27）年12月号

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「大つごもり」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

入力：酔いどれ狸

校正：Julki

2015年2月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大つごもり

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>